

湧き出ずるその源の深きほど  
 法の真清水ゆたかなるらむ



全應寺水琴窟

どうぎょう

平成26年3月10日  
第39号

発行 梅花流師範・詠範の会  
会長 本間雅憲  
題字 初代会長・故加藤信三師  
編集者 (広報部) 亀谷隆道

梅花流師範・詠範の会事務局  
大崎市協和 太寧寺 伊藤道人  
電話 (0188-96-2029)

# 今年の目標は

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 本間 雅 憲



新たな年、平成二十六年が始まりました。  
 今年もよろしく願います。

来る二十七年は、大本山總持寺二祖峨山禪師の大遠忌が挙行されます。今年の全国大会において「大本山總持寺二祖峨山禪師讚仰御和讃」を参加者全員でお唱えすることになっています。参加不参加は別にして、峨山禪師様のお徳を偲び、この機会に今一度お唱えをしてみたいと思っています。

ところで、皆様の今年の目標はどんなことですか。もちろん梅花流詠讃歌の目標です。

※イロ・ツヤ・アヤに挑戦する

※一曲を決めて習得する（検定受検予定の人は課題曲となるでしょう）

※「紫雲」・「梅花」等の替節を中心に習得する

等々いろいろ考えられると思います。各々の目標に向かって梅花流詠讃歌を研鑽していきましょう。

また、自分の所属する梅花講の練習会だけでなく、宗務庁主催の本庁講習会や宗務所・禅センターの講習会、師範・詠範の会主催の一泊あるいは一日講習会に参加してみませんか。新たな目標や課題が見つかるかもしれませんよ。

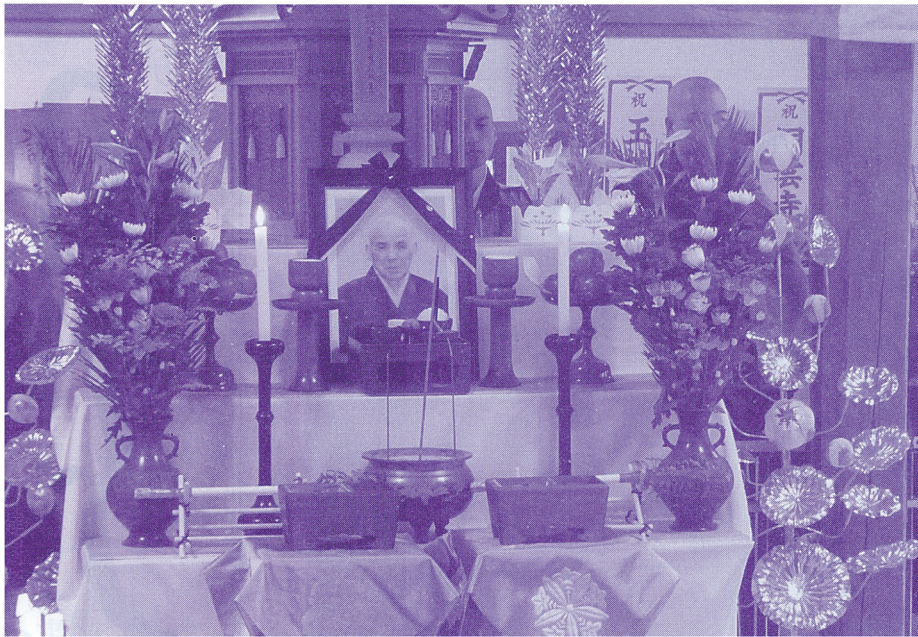
今年度奉詠大会は、県北は二ツ井、中央・県南は湯沢での開催を予定しています。多くの皆様の参加をお待ちしています。

秋田県梅花流の開拓者

全応寺三十四世 佐藤仁鳳老師の

本葬儀がしめやかに営まれる

新田寺住職 保坂春聴



平成二十四年七月三十一日に九十四歳を一期として遷化（永眠）されました大館市の本宮寺六世・全応寺三十四世住職でした一級師範齋嶽仁鳳和尚様の本葬儀が昨年十月二十七日に大館市中野の全応寺本堂にてしめやかに営まれました。

当日は、多くの檀信徒と共に、本宮寺梅花講員・全応寺梅花講員や県内外の宗侶等二百五十人程の会葬者で広い本堂も満席の状態になりました。

既に、仁鳳老師の御功績に付いては「同行」三十七号紙上に玉鳳院住職柳川浩二老師が追悼文を載せておりますので重複することになりますが、県内に梅花流を根づかせた開拓者、「生み



の親」であり「育ての親」のお一人でも在ります。特に、詠讃歌の源流である法式声明の大家として、その豊富な知識と経験に裏打ちされた指導で多くの師範・詠範を育てました。

また、檀信徒講員一泊研修会を立ち上げ、本堂の仏様に見守られながら、御授戒のように法悦に浸れる研修会を太平寺亀谷健樹老師と共に

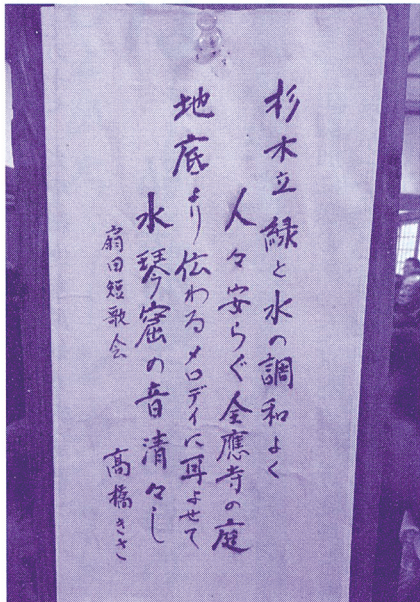
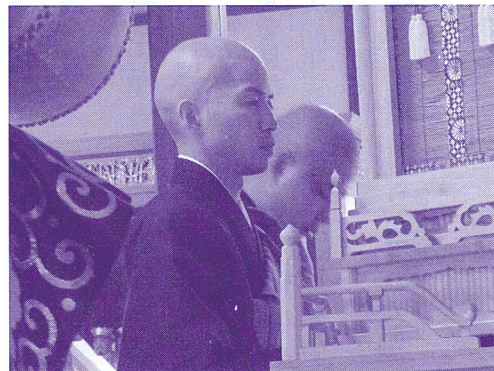
始められたのも御老師でした。この研修会は、梅花の講習は勿論ですが、三時の勤行（朝昼夕のお勤め）、朝の坐禅、夜の坐禅、三度の食事は手作りの精進料理で本飯台という、他に類を見ない会となりました。当然、事務局兼講師控室は、私達若い宗侶・師範にとつては別の意味での講習会場になりました。御老師から御指導を戴く絶好の機会となりました。宗門の長い伝



統の中から生まれ出て来た「梅花流」だという事を、私達に体得して欲しかったものと思っております。

遷化後の三十五

日小練忌法要は、師範詠範の会員有志によつて、特に作られました下記「叢嶽仁鳳大和尚詠導御和讃」を奉詠して報恩のまことを捧げましたが、この度の本葬儀の式中でも、在りし日の御老師を偲び左記の御和讃を報恩奉詠してご冥福を祈りました。



ぜんがくにんぼうだいおしょうえいどうごわさん  
叢嶽仁鳳大和尚詠導御和讃

一、心の眼くもりなく

承け継ぎたまいし正法を

あまねく世々に伝えんと

誓願高くかかげつつ

二、山をば越えて河渡り

梅花の心植えながら

いばらの道を六十年

秋田の大地に華開く

三、迎える今日の法延に

仁鳳老師の御苦勞を

一入深く偲びつつ

いよいよ仰ぐ御示教を

（開山忌御和讃一部変更）

梅花のふるさと

詠讚歌の生まれた風景 (その十七) 大聖釈迦牟尼如来御詠歌

# 草庵の誓い 弘法救生のおもい

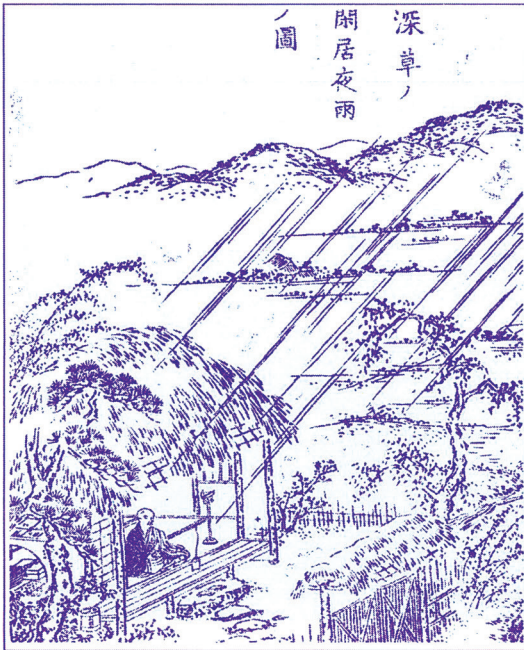
大聖釈迦牟尼如来御詠歌 (原歌)

草の庵にねてもさめてもまふすこと

南無釈迦牟尼仏あはれみたまへ

傘松道詠

高祖道元禪師がまだ永平寺を開く前のことです。中国での修行を終え、日本に帰った道元禪師は、



深草ノ  
閑居夜雨  
ノ圖

ひとまず出国前に縁のあった京都建仁寺に身を寄せました。やがてそこを離れ、京都深草の地にあった寺院旧地に残る安養院に住まいを移すことになります。三十一歳の頃でした。安養院の規模は具体的に伝わっていませんが、伽藍の整った寺院というものではなく、一人暮らしにやつの小堂のような所であったと思われまします。道元禪師はここを「閑居」「草庵」と記しています。その草庵にお住まいされていた頃に詠まれたという和歌をとりあげます。

## ◇草庵の道元禪師◇

中国での修業時代、禅僧の語録を読んでいた道元禪師と、そのようすを見たある中国僧が、次のような問答を交わしています。

僧「それを読んでどうする」

道元「日本に帰って人々に教えようと思ひます」

僧「教えてどうする」

道元「人々を救つてあげる(利生)のためです」

僧「それが結局何になる」

道元禪師は答えに窮してしまひます。問答はこれでお終いで、道元禪師は「はく然とした(利生)」

「人を救う」ために修行するという思いを一から見直すことになったと伝えられます。

利生とは、お釈迦様の誓いそのものでした。釈迦の誓願とは「法華経」「如来寿命品」にある、以何令衆生 得入無上道 速成就仏身

なんとかして人々を無上の道に入らせ、少しでも速く仏の身にしてあげたい

というものです。道元禪師は、釈迦の誓願を受け継ぎ、少しでも早く本當の教えを弘めて、世の人々を迷いの世界から救つてあげたい、と考えていたのです。おそらくそれは、若い修行時代から、日本に帰つて永平寺で活躍する壮年期、そして臨終を迎えるまで、生涯変わることのない強いお心でした。土弦禪師は晩年に書き終えることになる「正法眼蔵」という本の最終巻を、自分の最後の願ひは「釈迦牟尼佛にひとしくしてことなることなからん」と結んでいひます。

道元禪師が中国から持ち帰つた教え。それはまだ日本には伝わっていないものでした。当時はまだ平安期以来の旧仏教系の影響力が強く、新興勢力として台頭してきたのは浄土宗系の教え、そして道元禪師とは別系統の禅の教えでした。道元禪師は自分に伝えられた教えが、これまでの日本の仏教とは違ふことを十分知っていました。そしてその教えは、まだ日本で広く受け止めてもらへるだけの素地が育っていない、ということもよく知っていました。

深草の草庵で過ごしていた頃の状況をそのように考へてよいでしょう。懷辨禪師はこの頃、道元

禅師を訪ねていますが、側にお仕えるようになるのはしばらく後のことです。自分の教えを受け止める人も少なく、もちろんお寺や土地を寄進してくれる信者もまだ現れず、道元禅師はひとり、草庵で坐禅修行して過ごしていました。

その頃、道元禅師は「弁道話」という書を著しました。それは日本で初めて唱える正伝の仏法の宣言でもありました。その書の中に、

中国の紹定という年号の初め、故郷日本に帰った時から（弘法救生のおもい）教えを弘め人々を救うことを念願とした。それは重い責任を負ったのと同じことだ。だが、今はまだそうした心の重荷を解き放ち、力の限り教えを弘める時が熟していない。その時期を待つゆえに、しばらくは雲のごとく浮き草のように一所不住の暮らしに身を任せていよう。と記しています。

道元禅師は息をこらして、自分の教えを世に解き放つ機会を待っていたのでした。

この頃、次のような偈も作っています。生死憐れむべし雲の変更  
迷途覚路、夢中に行く  
ただ一時を留め、醒めてなお記す  
深草の閑居、夜雨の声

（生死をくり返す人間世界は、雲の現れまた消えゆくようにはかなく憐れである。この生死の中では迷いも覚りも夢の中のことのようにだ。だがその中にあつても忘れられない一事がある。深草のわび住まいにあつて、夜の雨の音を聞きながらも、

ここに見える「忘れられない一事」こそが、（弘法救生のおもい）だったのです。

らりぬちれりりあち大束紹定のまゝり本御よかへ  
どーとふちち弘法救生とあつとひとぢりうすも重擔と  
かふふとけるうあとーちりわりふ弘通のうろと救下  
せん激揚のときとまらゆへよちちらく雲遊萍寄して  
返さふ先哲の風ときとえびとひたさーとあつりら

◇弘法救生のおもい◇

道元禅師が深草に閑居した年は、異常気象により草木や農作物が枯れ果て大飢饉が発生し、翌年には京の道々に餓死者があふれたと伝えられています。もとより迷いと悲しみに満ちたこの世を、仏法の力によつて救いたいという（利生）の願いを掲げていた道元禅師は、そんな世相を目の当たりにしてますます思いの高まるのを感じていたでしょう。しかしながら時機は未だ熟していませんでした。その折りに詠まれたのが、  
草の庵にねてもさめてもまふすこと  
南無釈迦牟尼仏あはれみたまへ

という歌でした。  
（弘法救生）という思い責務を、道元禅師はお釈迦様より引き継いでいる、と自覚していました。その責務の重大さに比べ、自分の置かれている状態ははるかにみすばらしく見えたのかも知れません。けれども道元禅師は、こう思っていたのではないでしょうか。

「いまはまだ充分な仕度が調っていませんので、お釈迦様からいただいたお役目を果たせざるにいますが、どうか私のことを見捨てずに、しっかりと見守っていて下さい。かならずやあなたにお誓いした（弘法救生）をこの国において実現させます。この草庵にあつて寝ても覚めてもそのことばかりを思っています」と。

この歌には、道元禅師のそうしたやむにやまれぬ（弘法救生）への思いと、釈尊へのひたすらな信仰が込められているように思うのです。

# 梅花流秋田県奉詠大会

## 県南・中央地区に 参加して

十五教区久昌寺 赤石基彦



十月十八日横手市の大森体育館にて県南・中央地区の梅花流秋田県奉詠大会が開催されました。県南地区での開催は、旧大

曲市で開催された昨年に引き続いてのことです。県内でとりわけ梅花流詠歌の普及が進んでいない、講員の少ないこの地域で奉詠大会を開催することは、檀信徒一般の方々に広く知っていただくため、曹洞宗秋田県宗務所の思い切った取り組みです。

当日は晴天に恵まれ、講員の皆さんは難儀せずに会場入りできたようでした。大会の始まる前からあちこちで「お久しぶり」と師範の先生方や他の梅花講の講員さんたちと談笑する場面が見受けられました。

開式法要では講員の皆さんが誰ともなく一緒に御詠歌をお唱えだして、気が付くと会場中大合唱となります。自然に口ずさむほど皆さん御詠歌が好きで、お唱えが心地良いのようです。私は何度か奉詠大会に参加していますが、講員の皆さんの御詠歌への純粋な気持ちを感じ、



感動する瞬間です。

会場設備の関係で今回の奉詠大会では登壇ごとに緞帳が下がり、壇上で整列し奉詠することになりました。初めは進行が遅れることが懸念されました。

当日は登壇係と講員の皆さんのご協力で遅れることなく全登壇が進んでいきました。

午後からは一般の方も来場され、「今 思い



「一曲講習」では講員の皆さんは軽快にお唱えしていましたが、一般の方は雰囲気を探りながらの参加でした。

今回の奉詠大会は当初予定の開催日や会場から急遽変更になり、梅花主事さんをはじめとする宗務所の皆様や師範の先生方、運営役員の皆様は開催まで大変な準備でありました。限られた会場設備のなかでも、おかげさまで無事大会が円成出来ましたことは、とても良かったと思っています。

でもまだ課題もあります。県南開催における最大の眼目であります「梅花流詠歌の普及」への効果や今後の取り組みについて検証が必要

を込めて 梅花流詠歌への誘い(いざな)いと題して師範詠の皆様による模範奉詠が行われました。ナレーションを交えた奉詠には皆さんじっくりと聞き入っていました。その後の「ともに歌おう



です。宗務所で掲げているこの目標がその場限りになってしまわないためには、また梅花流詠讃歌の普及には、地域ご寺院様のご理解とご協力が何よりも大事です。

今後も梅花流の普及を図るなら、各ご寺院様への働きかけをむしろ積極的に行っていくことが効果的なのではないかと感じました。

最後に、改めて本大会開催にご尽力されました皆様に感謝と敬意を表しまして、私の大会参加への所感といたします。

この大会の感想をいただきました。

- 大変良かったです。参加してみても、無常御和讃を聞き涙が出ました。
- 心が安らいだ。女性の頑張りが見えた。女性に出来ることの一つだと思った。
- 心が洗われ、優しい気持ちになりました。又、仏様を大切にという気持ちが強くなりました。
- 「梅花」って、心が洗われるような優しい歌ですね。とても良かったです。また、来年(?)もよろしくお願い致します。
- 感無量でした。
- 「御詠歌」初めて聴きました。とても耳に「こち良い」と感じました。
- 心にしみました。佛教の勉強をしたいと思いました。
- 聴かせていただいて涙が出ました。
- すばらしいと思いました。私も仏様を大事に毎朝、ごはんを供えています。心が洗われました。(唱えることはありません)
- 初めて聞きました。穏やかで、やさしく、心にしみわたり感動致しました。皆さんの精進のたまものですね。御詠歌の歌詞を読ませていただきましたが、どれもありがたなお言葉を合わせていただきました。これからは、感謝の気持ちを込めて御供養致します。このような機会を与えていただきありがとうございます。
- こういう大会を聞くことができ、たいへんありがたいと思います。

テレビホン梅花

(毎週土曜日にテロップが代わります。)

☎ 018-873-7676

八	七	六	五	四	三
二月	二月	二月	二月	二月	三月
二十三日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日
二十九日	二十九日	三十日	三十一日	一日	一日
報恩供養(和)	慈念(和)	地蔵(和)	孟蘭盆会(和)	戦災精霊(和)	報謝(和)
御授戒(和)	道交(和)	同行人(和)	澄心(和)	地蔵(和)	修証義(和)
平和祈念(和)	浄光(和)	慈光(和)	観音(和)	梅花(高祖)(和)	梅花(高祖)(和)
慶祝(和)	伝心(和)	四摂法(和)	誓願(和)	月影(和)	無常鐘(和)
妙常(和)	道心利行(和)	追善供養(和)			

〒010-0111 秋田市金足岩瀬字前山3 東泉寺 (☎ 018-873-2675)

※ご意見、ご要望等をお気軽に寄せ下さい。

## ちよっと ぶじょほう ~梅花つれづれ~

## 想いは廻る

円福寺 副住職

伊藤 泰裕

私と詠讚歌との出会いは、父が祖母達仲間に対し教えていたのを耳にした小学生の頃だったと思います。ばあちゃん子だった私は、祖母達の輪の中に入ってお菓子をもろうことを楽しみにしていたので記憶にあるのだと思います。花より団子だった私を親が僧侶の道へと導いてくれ、僧侶として歩み始め円福寺住職とのご縁を頂戴し、現在の寺に入寺して七年が経ちます。私の実家をご存知の方もあろうかと思いますが、角館にある龍巖寺の二男としてこの世に生を受け現在三人の子を持つ父親にもなりました。新天地での檀務、また親としての子育てと奮闘する日々には思いがけず、同教区恩徳寺住職岩館祖芳師範のご尽力、ご法愛を賜り、平成二十三年六月〜二十五年二月までの約二年間、梅花養成所（宗務庁）での講義を受講させて頂き、二十五年の春に晴れて四級師範の資格を頂戴することが出来ました。とは言え、まだまだ初心者。素人同然のお唱えの身です。日々、恩徳寺御住職様の教えを請いながら同教区内の梅花講員様方と楽しく勉強させて頂いております。

宗務庁の養成所に行くことが決まった時は

私よりも若くて沢山やる気のある方々がいる中で、なぜ私が養成所？とも思いました。また、父の具合が思わしくなかったことや東日本大震災の遭った年からの受講だったということも重なり何かと不安でした。しかし、恩徳寺御住職様より背中を押して頂き、お陰様



で詠讚歌と向き合うことが出来ました。一回目の受講が終わって家に帰宅してすぐに実家の父の病床に足を運び耳元で習いたての詠讚歌をお唱えしました。「お前が御詠歌？」と言われた気もしましたが今思えば、「俺も教えていたんだぞ」と言わんばかりに時に笑ったり、渋い顔をしたりして聞いてくれました。

そんな会話も虚しく、その数時間後に父はこの世から旅立ってしまいました。今思えば、お唱えを聞いて喜んでくれたようにも感じておりますし最後の良き思い出です。

鹿角に来る前の五年間ほど北海道旭川のお寺に勤務していた頃のこと、月参り後に話を聞いて「全国大会（樹海ドームでの大会）で秋田に行つて来ましたよ。秋田弁での挨拶を聞いて、秋田に行つて来たという感じがしました」と聞き、父の「おもてなし」精神を遠くにしながら感じたことを思い出します。

祖父母から父母へ、父母から私等家族へと代々受け継がれて行くものは、ほんの一握りの小さなものかもしれませんが、現在私が僧侶、父親として行っていることは祖父や父の真似をしていると思うことがあります。「真似るは学ぶこと。真似ることが身に付けば単なる真似でなく自分そのものになる」と故宮崎奕保禅師はよく言っておられました。詠讚歌の歌詞やメロディは相手に気持ちが届き易い經典であり想いは廻り巡って人の心に届くと習い始めてから私は思っております。今後他の行事や活動も梅花流詠讚歌同様に、様々な思いを廻らして受け継ぎ伝えて行き、たくさんの幸せの花が一つでも多く咲くように頑張つてまいりたいと思えます。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。